

〔研究論文〕

インスティテューショナル・エスノグラフィーとは何か － *Simply Institutional Ethnography* を読む(1) －

上谷 香陽

〔Article〕

What is Institutional Ethnography?: Reading *Simply Institutional Ethnography*. (1)

Kayo UETANI

Abstract

This paper examines *Simply Institutional Ethnography : Creating a Sociology for People* by Dorothy E. Smith and Alison I. Griffith and attempts to clarify what Institutional Ethnography(IE) is. This book is the final work of D. E. Smith, who passed away in June 2022. Although this book was co-authored with Griffith, the content of the book is such that the basic ideas of Smith's sociology, which she had expressed in her own monographs, can be grasped. This paper is a reading of this book, relying on Smith's discussions in her previous monographs. And this paper attempts to explain this book's purpose.

The book consists of 11 chapters, but this paper will cover chapters 1 and 2 of Part I and up to Chapter 3 of Part II. Two points are emphasized in the discussion. First, IE inquiry is grounded in what actual people do, in their experiences, and in the ways in which what they do is coordinated to what others do. Second, for IE, language is always inseparable from the practices of using it. Language is seen as something that people do and as an essential component of the way in which what people do is coordinated. Relying on this perspective, IE seeks to create a sociology that can "expand the scope of our knowledge of the world which we participate in but we cannot apprehend directly".

1. はじめに

本稿は、Dorothy E. SmithとAlison I. Griffith著 *Simply Institutional Ethnography : Creating a Sociology for People* を考察し、Institutional Ethnography(以下IE)とは何かを明らかにしようとするものである。この本は、2022年6月に亡くなった、Smithの最後の著作である。本書はGriffithとの共著であるが、これまでSmithが自らの単著で述べてきた、Smithの社会学の基本的な考え方が把握できる内容になっている。本稿は、この本を、Smithのこれまでの単著での議論に依拠しながら読解し、その趣旨を解説するものである。

Smithらは、序文においてIEについて次のようにまとめている。

IEは、人々の身体的存在の局所的な場における経験に立脚し、経験の内部からは把握できないもの、すなわちその経験の組織化に暗黙に含まれる社会的関係を発見しようとする社会学である。それは社会学者に、私たちが参加している毎日／毎夜の世界が、人々の局所的な活動—そこにはもちろん私たち自身の活動も含まれる—においてどのように組み立てられているかを発見するよう求めている。IEは、社会的なものを「意味」や「規範」としてではなく、特定の時間に特定の場所に状況づけられている人々の間で実際に起こっていることとして考える。IEは、人々が自分の毎日／毎夜の世界についてよく知っていることに依拠し、人々が経験上知っていることを専門家の「現実」に置き換ええないのである。IEの目的はむしろ、人々のための社会学を創造することにある。それは、私たちがその一部でありながら直接的に理解することができないものについての、私たちの知識の範囲を拡大することができるような社会学である。探究は、人々の日常的な経験である局所的な世界の中から発展し、局所的な場を横断して人々の活動を連係する社会関係や社会的組織化を探索し、私たちの日常生活に深く関わっている権力の作動を解明していくのである(Smith & Griffith 2022:xiv-xv)。

IEにおけるinstitutionとは、第一義的には、人々の日常生活に深く関与している、教育や医療や行政や経営や法律や学問などに関わる公式の組織や機関や施設などのことである。ただしそれは単に実体的な個別の組織を指すのではなく、相互依存的に関連する複合体を成し、複数の人々の行為が連鎖し連係する(coordinate)社会諸関係の交差点として捉えられている。institutionをこのような水準で捉えることは、「人々の日常的な経験である局所的な世界の中から発展し、局所的な場を横断して人々の活動を連係する社会関係や社会的組織化を探索し、私たちの日常生活に深く関わっている権力の作動を解明していく」ことを目指す、IEの社会学的探究のあり方と深く結びついている。「機関」「制度」などの日本語に翻訳すると誤解を招く恐れがあるため、本稿では英語のまま表記する。

この本は全11章で構成されているが、本稿では、第1部「IEを紹介する」の第1章「序論」と第2章「エスノグラフィーの資源としての人々の経験」および第2部「役に立つ概念」の第3章「概念、しかし理論ではなく」までを取り上げる。

2. IEの基本的な考え方

第1部「IEを紹介する」は第1章「序論」と第2章「エスノグラフィーの資源としての人々の経験」から成る。第1章序論では、IEとは何なのかについての基本的な考え方が示されている。IEが、理論を求めず人間の社会的行動を説明するつもりのない社会学として、どのようにして進むかについての基礎が説明される(Smith & Griffith 2022:10)。ここで目指されるのは、実際の人々、かれらのワーク⁽¹⁾、かれらの生活の現実の条件に基づいた社会学への転換である。IEはこの場所から探究を行なう。IEはこの場所から、人々の実際に行なっていることが、かれらを超えて広がりかれらの生活を征服するinstitutional的(institutional)諸関係にどのようにして巻き込まれ連係されるかを開き、発見するのである。

2-1 IEとは何か

IEが女性運動と関連する社会学と考えられていた初期の頃、それは質的社会学の一般的なカテ

ゴリーに留まっていた。IEを方法論としてカテゴリー化することは、ある意味で、標準的な社会学的慣行(practices)を使用する調査の中でIEが使用されうるだろうということを示唆した。しかしIEは、いわゆる質的社会学の一般的なカテゴリーの一つとしての質的方法ではない、それ以上なのだ、Smithらは言う(Smith & Griffith 2022:3)。IEは社会学であり、実際の人々やかれらの行なっていることから始まり常にそこにとどまる、社会的なもの(the social)への探究方法である。ここで「社会的なもの」とは、他者たちの諸活動との連係という側面に着目した、人々の進行中の諸活動のことである。IEは、どのようにして実際の人々の行なっていることが他者たちの行なっていることと連係されるのか、つまり、Smithらが「日常生活の進行中の社会的組織化」と呼ぶものがどのようにして実際に起こるのかを発見し、探究しようとする社会学である。

実際の人々や、かれらが行なうことが他者たちの行なうことと連係するやり方と常にいっしょに仕事をするというIEの発想は、確立された社会学とは深く食い違っているとSmithらは言う(Smith & Griffith 2022:5)。多くのアプローチがあるものの、確立された社会学が共通に有しているのは、人々の行為やかれらの間で起こっていることを一般化された抽象概念で置き換えるという、客観化する言語実践である。例えば、標準的な社会学的記述(account)においては、社会構造などの概念的実体が行為体(agency)の地位を与えられている。抽象的な概念空間の中で、それらの概念的実体は一人々やかれらが実際に行なっていることには一度も言及することなく一行為の主体や客体の役割を果たすことができる。確立された社会学の言語実践の構成的慣習は、人々の行なっていることを示す動詞を名詞相当語句(nominals)に翻訳し、行為体としての実際の人々の存在を置き換えていくのだと、Smithらは指摘する。

「私たちの学問的習性(ハビトス)は、私たちが必要以上に名詞を使用していることを意味するかもしれない」とSmithらは言う(Smith & Griffith 2022:6)。社会学のこの構成的慣習は、実際の人々の生活と行なっていることの立ち位置から社会学を書こうとするIEの試みを、容赦なく邪魔するのである。それゆえIEは、人々の存在を一般化された抽象概念的に置き換えるような言語実践を採用してきた社会学から、自覚的に分かれようとする。対照的に、IEは、実際の人々やかれらの行なっていることにいつでもとどまり続けようとする。IEの基礎となる焦点は、いつでも、日々の生活における実際の人々から学ぶことや、かれらが行なっていることがどのようにして他者たちの行為と連係するか—私たちがどのようにして社会的であるか—に合わせられている。ここでSmithらが強調するのは、IEにとっての社会的な次元は、人々の行為/活動が他者たちの行為/活動と連係するものとして取り上げられる時にもみ現れるということである。

IEの探究は複数の対話から成るとSmithらは指摘する。一つは、ものごとがいかにして行なわれているかや誰が何を行なっているかを、実際の人々の経験から学んでいる時に行なわれる対話である。IEの研究者は、聴いたり観たりすることによって、あるいはその両方によって学んでいる。学ばれるためにそこに存在しているとは知らなかったことを学んでいることさえしばしばある。その一方で、IEの研究者はまた、自分が学んでいることを、それに基づいてこれから書こうとするエスノグラフィーとの対話に入れている。この二つ目の対話は、人々が自らの経験において／をとおして知っていることについて話していることを、どのようにIEのエスノグラフィーに入れるのかをめぐる対話である(Smith & Griffith 2022:6)。それは、起こっていることを考えるやり方、想像するやり方、話すやり方、書くやり方、見るやり方、注目するやり方に接続され、それらのやり方によって組織化される対話一言説的対話一である。

2-2 支配する諸関係を発見することとしての、IEのエスノグラフィーを行なうこと

IEはどのように展開され、何を探し、メモに何を書き、テキストの中に何を探し出し、インタビューの中の何をたどり、トランスクリプションの中の何に印をつけるのだろうか。Smithらが指摘するのは、フィールドワークを行なっている時、IEの研究者が人々と分かち合っている局所的な世界における直接的な関わりの中には、IEが何を探し、何に注目し、何を書き、何を質問するべきかを教えてくれるものは何もないということである。IEのエスノグラフィーを行なうためには、単に局所的な世界における直接的な関わりの中で人々が他者と協働して行なっていることに焦点を合わせる以上の、別の何かが必要である。探されるべきことがもっとある、とSmithらは言う(Smith & Griffith 2022:7)。

IEが取り上げる人々の行為の世界は、実際の人々の連係された諸行為の次元を持つ。それは人々の局所的な感覚の範囲を超えて広がるものである。人々の毎日の生活は、Smithらが支配する諸関係(ruling relations)と呼ぶようになったものによって組織化されている—その諸関係は、人々がそれらに参加しているにもかかわらず、人々にそれらの客観化された様式を押しつけるのである。この点についてSmithらは、Janet RankinとMarie Campbellの著作*Managing to Nurse*(『看護を管理する』)(Rankin & Campbell 2006)から、病院のシフトに就く看護師たちの記述を引用する。

午前7時30分、病院の外では、空はまだ暗い。看護師たちは昼間のシフトのために病院の病棟に到着する。彼らのほとんどは、パステルカラーのパンツスーツと運動靴を身につけている。それぞれが、正看護師あるいは認定看護師という、自分の地位を明らかにするネーム・タグをつけている。病棟Aでは、昼間の勤務の看護師たちがナース・ステーションに集まり、印刷され壁に貼られた 仕事の割り当てをチェックし、紙と鉛筆を取り、受付の後ろのミーティング・ルームに入っていく。録音されたメッセージを聴きながら、かれらは「シフトチェンジ報告」を受ける。一階下の病棟Bでは、交代のルーティンは少し異なっている。新しく到着した看護師たちは、夜間のスタッフが残した、書かれた報告をチェックする。それは、分厚い紙の束であり、患者たちの夜間の状態—睡眠、痛み、混乱、失禁、点滴管理など—が要約されている。患者との仕事開始に出発する前に、かれらはメモを取る。これが、ヘルス・ケア・チームの熟練した成員として自分のおさまりの職務に取りかかっている看護師たちにとっての、ありふれた日が始まるやり方だ(Rankin & Campbell 2006:4[引用は(Smith & Griffith 2022:7-8)、太字はSmith & Griffithによる])。

ここで記述されていることのほとんどは、当時、カナダのあらゆる病院の朝のシフトの開始の際に観察されえただろう、ありふれたこと gara であった。しかし、この記述で使用されている言葉を注意深く見てみると、この記述の中に暗黙のうちに含まれている一般化する関係の複合体を認識することができる。Smithらは指摘する。そのような諸関係—存在し、自明視され、しかし実際には観察可能ではない—を示唆する言葉が存在する。Smithらはそれらに太字で印をつけた。印をつけた言葉はこの記述にとって不可欠な言葉であるとともに、この日々の局所的実践が、この場所で、この時間に、これらの人々の間では発見可能でなく、観察可能でもない諸関係に埋め込まれていることを示唆する。

例えば「病院」とは、看護師たちがかれらの仕事を行なうために入っていく単なる建物以上のものである。それは、法的に認定された専門家がケアや救済を求めている人々にそれらを提供する、確立された職場としての病院、としてのみ存在する。カナダにおいては、それは、組織的、経営

的、財政的に、州のヘルス・ケア・システムとつながれている。あるいは、そのような諸関係に互いに接続し合う、別の言葉を選び出すこともできる。「正看護師」「認定看護師」などのカテゴリーは、誰かがこの地位に「認定される」ために必要な訓練プログラムを有するカレッジや大学といった、他のinstitutional的複合体への暗黙の指示を伝える。ここには、労働市場の諸関係や、看護師の認定における医療専門職の役割、という含意がある(Smith & Griffith 2022:8-9)。

IEにおいて「institutional」や「institution」とは、単なる実体的な機関や組織としてではなく、諸関係の複合体として捉えられている。それらは、存在はするが、暗い空や壁や紙や鉛筆が見られ感じられるのと同じやり方で物理的場面において実際に観察されるわけではなく、観察可能でもないとSmithらは指摘する。

人々が病院で行なっていることを組織化する諸関係は、テキストの媒介で、局所的場면을横断して標準化され一般化される。と同時に、看護師たちがかれらと一緒に運んでくる習慣、訓練、慣習、かれらの技能、かれらの職業的専門的言説においても、それは再び複数の局所的場면을横断して広がり(generalize)、かれらの弁別的ワークが他の専門職のワーク—この場合は、病院の場面で—を補完することを可能にする(Smith & Griffith 2022:9[太字は上谷による])。

ここで太字で示した、「言説」「ワーク」「テキスト」は、IEの探究にとって中心的な概念—理論としてではなく、探究の方向や目のつけどころを示唆するものとしての一である。これらの概念は、第二部で改めて詳細に論じられる。

IEの探究が興味関心を惹きつけられているのは、支配の客観化する諸関係である。Smithらが注目するのは、それらの関係の中で、行為の連鎖は、複製可能なテキスト—一つ以上の場所で、一回以上、一人以上の人物によって読まれ、見られ、聞かれうる—によって関係されている、ということである。私たちはいつでも自分自身から出発するし、いつでも自分の身体的存在の中におり、したがって、自分の日常世界に位置づけられている。にも関わらず、私たちの行なっていること／私たちのワークは、テキストに媒介された支配する諸関係をとおして、他者たちの行なっていること／他者たちのワークと超局所的に関係されている。そしてそのようにして、私たちは、私たちに対して立ちほだかり、私たちの生活を征服する諸関係に参加し、力を与えている。IEの探究が焦点を合わせるのは、このことである(Smith & Griffith 2022:10)。

3. エスノグラフィーの資源としての人々の経験

第2章「エスノグラフィーの資源としての人々の経験」では、IEの探究が、本質的に対話的(dialogic)な特徴を有するものであることが強調される。この章は、第2部の序章を準備するものとして位置づけられており、二つの対話の連鎖としてのエスノグラフィーを開発する、という考え方が提示される。

一つ目は、物事がどのようにして行なわれているのかや誰が何を行なっているのかについての、知識の源となる人々から学んでいる際に行なわれる対話だ。IEの研究者は、かれらの経験から学ぶ。しかし、経験はいつでも対話である。たとえ、エスノグラファーの責務が人々から学ばれることに対していつでもオープンであることであるとしても、あるいは、エスノグラファーができればあらかじめ期待さえしていなかった何かを学ぼうとしているとしても、エスノグラファーは同

時に一定の興味関心を持っている。すなわち、IEのエスノグラファーが開きたいトピックが存在するのである。二番目は、第一の対話で学ばれたことから、IEのエスノグラフィーとして書かれることがらを組み立てる際に行なわれる対話である。個別的で具体的な人々の経験の記述報告(account)を資源として利用しながら、人々の行為の多様な側面が、個別具体的な個人の経験を越えて広がる社会関係によって組織化されるやり方を可視化するための対話である。

3-1 IEの探究における「社会的なもの」の所在

IEは、人々が知っており経験している日常生活に基礎づけられた研究のプロブレマティク—探究の一般的方向性や焦点—を採用することによって、オルタナティブの社会学を考案し開発している。IEの探究は、人々の生活や行なっていることのアクチュアリティの経験から学び、それに依拠する。いかなる個別のエスノグラフィー的プロジェクトにおいても、社会的なものは、「発見」されるべきであり、「理論化」されるべきではないとSmithらは強調する(Smith & Griffith 2022:13)。IEの研究者は、人々が話すことから、あるいは観察から、あるいはその両方から、人々が何をどのように行なっているかを学ばなければならないのである。

IEの探究の基礎はいつでも、実際の場面で実際の時間に他者たちとの関係において進行する、実際の個人の実際の実践である。と同時にこの探究は、個人を超えて日々の生活を越えて広がる社会諸関係が、どのようにして人々の生活に入り込み、人々の生活を組織化するのかを発見しようとする。これらの社会関係は、人々の日々の生活にとって不可欠であり、至極当然のこととみなされている可能性がある。IEの研究者は、誰かの行為を、別の場所や別の時間で他者たちが行なっていたあるいは行なうであろう行為の連鎖における一つの「瞬間」として学ぶ。誰かの行為のこの「瞬間」は、進行中の、協働する、連係する諸個人の活動に状況づけられ、個人を超えて拡張する社会諸関係につながれている可能性がある。ここに、IEの探究が焦点を合わせる、「社会的なもの」が存在する(Smith & Griffith 2022:13)。

標準的な社会学的手続きのように理論や概念から出発する代わりに、IEはいつでも、身体的存在における実際の諸個人や、かれらの行なっていることや、かれらの行なっていることが他者たちの活動と連係するやり方に関わり続ける。人々の日々の生活や行ないは、かれらの経験の内部から観察されうることを超えて広がる諸関係に巻き込まれている。人々は、この探究が焦点を合わせる社会関係に—自覚的にせよ無自覚的にせよ—自らの行為をとおしてアクティブに参加しているのである。IEは、人々の経験に依拠して、かれらが社会的世界において状況づけられている場所から見えることを越えて広がる社会関係を可視化しようとする。この意味で、IEは、説明(explanation)というより地図作成(cartography)に近いのだと、Smithらは述べる(Smith & Griffith 2022:20)。

SmithとGriffithは、一緒に仕事を始めた時、ともに小学生の息子のいるシングル・ペアレントだった。彼女たちは会うとよく、自分たちが「欠陥のある」親として扱われているやり方について不平を言っていたという。やがて彼女たちは、「シングル・ペアレント」が学校にとってそのような問題になる理由を理解するための研究プロジェクトにとりかかり、調査を始めた。それは、母親たちが毎日行なっている、学校で行なわれるワークに積極的に貢献するワークと、もし母親に時間がなかったりそのような貢献ができなかったりする場合は学校にとっての含意について学ぼうとするものだった(Griffith & Smith 2005)。インタビューで母親たちが自らの母親業のワークを話すにつれ、家庭での母親たちの日々のワークは学校での教師と生徒たちの日々のワークと連係されていることが明らかになった。それは、例えば、子どもを起こして、「時間通り」学校に送り出すことで

ある(Smith & Griffith 2022:14)。

ここでは特定の家庭内での母親業のワーク以上の何かが進行中であった。「時間通り」であるとは学校にとって何を意味するのか？その時間が何であるか誰が決めるのか？このありふれた質問に答えるためには、学期の教育時間数を指令する教育委員会のレベルで生み出される方針や、さらに、オンタリオ州教育法のことを考えなければならなかった。SmithとGriffithは、学校の校長たちと話す中で、数人の遅刻でさえ授業の開始を混乱させうる、ということ学んだ。授業日の規則正しさは、学校における教師と生徒のワークが、家庭で母親によって行なわれる—あるいは行なわれない—ワークと呼応して組織化されることをとおして生み出されていた。母親業のワークから始まる社会関係の地図は、特定の家庭を超えて広がっていったのである(Smith & Griffith 2022:15)。

ここでSmithらは単に、母親たちが家庭の中で行なっている、たいていは注目されることもない仕事を発見しただけではなかった。あるいは、ここでの目的は、個人の経験の中に、「シングル・ペアレント」といった所与の社会的カテゴリーの成員一般について学ぶることを見出すことではなかった。彼女たちは、母親たちの仕事をジェンダー化されたワークとして連係する、institution 的諸関係とは何なのかを問うたのだ。それらの関係の中で、例えば、子どもを起こして「時間通り」学校に送り出すという家庭における母親の毎日のワークは、学校における教師と生徒のワークと結びつけられるのだ。家庭における母親たちの毎日のワークの背後に、学校教育というinstitution 的諸関係が横たわっていたのである。

3-2 IEの探究における二つの対話

IEのエスノグラフィーを書く探究は、いつでも実際の人々とともにある。かれらの毎日の生活や行ないは、かれらの経験の内部から観察されうることを超えて広がる諸関係に巻き込まれている。観察するにせよ、人々の話を聞くにせよ、IEの探究は本質的に対話だとSmithらは指摘する(Smith & Griffith 2022:15)。観察されることやインタビューの話し手から学ぶことは、研究者の側からすれば、いつでも、学んでいることをIEの概念実践で編むハイブリッドな会話である。私たちは誰かと話しかれらの経験を聞いているかもしれない。しかしその後にはいつでも、他者たちによって読まれるために書かれるエスノグラフィーがある。ある意味で、二つの対話、あるいは対話の二つの段階がある。一つは、自分が話している、学んでいる、観察している人々から学ぶ時だ。もう一つは、自分が学んだことを、IEに関心のある読者のためのエスノグラフィー的記述報告を創り出すために、まとめている時である。

ただしSmithらが強調するのは、対話の二つの段階あるいは二つの対話という考えは、「データ」になるものを「集め」その後でそれを「データ分析」というような、方法論的連鎖を提案しているのではないということだ(Smith & Griffith 2022:16)。二つの対話は、実際の探究において完全に分離されているわけではない。IEの探究は、この二つの対話を行きつ戻りつしながら行なわれる、一連の発見の過程として捉えられている。

情報提供者との最初の対話の間に、研究者は、ものごとがどのようにして組み立てられているかを理解できるようになり始める。その過程で「データ」を再検討することで、探究の新しい方向が示される可能性がある。調査におけるある瞬間に学んだことから、知る必要のあるさらなること—IEのさらなる探査(explorations)がどこに行くべきか、誰と話すべきか、何を必要とするのか—が明らかになるかもしれない。Smithらは、エスノグラフィーを書くこと自体が、発見の源でもあると指摘する。それは、調査の対話について、以前には気がつかなかったさらなる局面を省察し

たり開くことができる。ある意味で、IEを行なうことは、あらゆる調査と同様、決して完成しない。常に、それ以上のことが言われうるのである(Smith & Griffith 2022:16)。

したがって、ここで、一番目の対話と二番目の対話という考え方は、方法論的指針として意図されているわけではない。むしろ単純に、IEの研究者の興味関心や意図が組織化される異なるやり方への、注意の引き方として意図されているのだと、Smithらは言う。最初は人々の経験からの基礎的学習の段階であり、その次は学んだことから自分が言わなければならないことへ旅をするやり方である。

3-3 対話としての「経験」

IEの探究において、無知は強みである。わからない、もっと知りたいということが、人々と研究者の異種混成(hybrid)の対話(Smith & Griffith 2022:17)を方向づける。研究者は観察している、質問している、あるいは、ただ聴いている—かれらの姿勢、目の焦点、「うーん」とか「ああ」は、人々の話を聴いていることを表現する。研究者はまだ、自分が何を見つけなければならないかを知らない。しかしこれまでのIE研究で築き上げられてきた概念や方法は、探究に方向性を与える。それだけでなく、この対話の中には、暗黙の二番目の対話が存在する。この二番目の対話は、研究者と人々との局所的会話を、IEに精通している読者—かれらに向けて、研究者はエスノグラフィーを書いている—のコミュニティと関係づけるのである。エスノグラフィーのためのインタビューにおいて、直接話されないこの二番目の対話への研究者の関わりは、ほとんどの部分暗黙のうちに行なわれているとSmithらは指摘する。

IEにおいて、経験という言葉は、ものごとがどのようにして組み立てられるかについて研究者はいつでも人々の視点から学んでいる、ということ思い起こさせるためのものである。IEのエスノグラフィーを書くための「データ」の中には、主体としての人々の理解や視点が保存されている。人々が話さなければならないことは、感情を含んでいる。しかし話すことはいつでも、行なわれていることや、行なわれたことや、起こっていたこと—言語や思考や感情を含む—に帰着する必要がある。エスノグラファーは、人々が経験していることの具体性から学ぶ必要がある。かれらは、人々が話していることについてもっと知りたいと思っている。そのためには、具体的な例や記述を求める必要があり、人々が抽象概念から降りて来るように励ます必要があるのだ。

IEの研究者は、いつでも人々の視点から学んでいる。しかしこのことは、エスノグラファーと人々との対話が、方向性を欠いたものであることを意味するわけではない。かつて無垢な大学院生としてただ観察するために出かけていった時、Smithは、ただ観察するということは無秩序になるということに気がついた。つまりそれは、どのようにして見るのか、何を選び出すのか、何をたずねるのか、何を追うのかを知らないということだ。そしてこの問題は、観察を行なう者が方向性を見つけた時—それが、フィールドに入る前に立てられた研究のための問いから生まれたのではないとしても—にのみ克服される。人々から学びたいと思うならば、エスノグラファーは自分が見ているものや探しているものについての何らかのアイデアを持っていなければならない。対話の中で、自分が予期さえていなかった、あるいは、自分が知りたいと思うだろうとは知らなかった多くのことを知るようになり、当初の方向性やアイデアが変化することになったとしても、である(Smith & Griffith 2022:20)。

経験という言葉は誤解を招く可能性もあるとSmithらは指摘する(Smith & Griffith 2022:17)。というのもそれは、何か実際に起こっており進行している時に、それが話し手にとってどのようなも

のかを「指示」しているように見えるからだ。誰かが自分の経験から話している時、それは本質的に対話であるということを認識するのは重要である。その人は、記憶に基づいて選択的に描写しており、それを聞き手のレリバンスに結びつけている。話し手は、聞き手の問いに関連する諸側面のみを選び出しているのだ。インタビューにおいてIEのエスノグラファーは、ある意味で話し手の経験を引き出し、話すことの中で記憶が組織化される時に、その経験を創出することを手助けしているのである (Smith & Griffith 2022:18)。

人々との対話は同時に、IEの研究プロジェクトとの対話でもある。エスノグラフィーの資源としての誰かの経験は、研究者によって組織化されなければならない。ただし、あらかじめ設定された解釈で支配したり、それを押し付けたりすることなしにである。例えば、IEの研究者は、ある特定の出来事の完全に正確な記述報告を得ることには関心がない。そうではなくむしろ、ものごとがなされるやり方や、それが個人を超えた行為の連鎖とつながれるやり方についての人々の知識に関心がある。研究者は、具体的で詳細で精巧な記述報告を欲している。なぜならば、より多く学ぶほど、人々の話していることが特定の記述を超えた諸関係につながられるやり方を、よりよく認識できるようになるからだ (Smith & Griffith 2022:18)。

IEのエスノグラフィーは、本質的に対話的な方法として理解することができる。IEの研究者は、人々から直接に学ぶことによって、人々とありふれたやり方で話すことによって、インタビューしたり観察することによって始める。それは第一の対話であり、IEの研究者は、人々自身の経験や、人々が行なっていることや参加していることについてのかれらの知識から学ぶ。この対話は、人々の間で起こる何かとしての、したがって、一人の個人が行なうことややり方を知っていることと同一視することは決してできないものとしての、社会的なものに依拠している。しかしIEの研究者はまた、自分が学んだことを連れて、二番目の対話に関わり始めなければならない。その対話は、IE研究の読者のためにエスノグラフィーが書かれている時に展開する。二重の対話の中で学ばれることに依拠しながら、IEのエスノグラファーは、浮上してきた問題(issue)に関心のある人々に書き返す／話し返すことができるようになるのである (Smith & Griffith 2022:20)。

2章の最後で、Smithらは、IEが「社会学の主流」(もちろんそれにも多くの種類がある)と呼びうるだろうものから分岐する、主なやり方を以下の4点に要約する。

- 1 人々の間で実際に起こっていることの記述報告を置き換え包摂する、抽象的な概念の中心性を破る。
- 2 人々を研究の客体とすること(かれらの行動を説明すること、など)から、かれらを主体とすることへ移動する。かれらの毎日の経験は、エスノグラファーにとっての信頼できる (authoritative) 資源なのだ。
- 3 個人化、あるいは、私たちが学んだことを特性や属性として個人に結びつけるという、概念的的方法的軌道を避ける。
- 4 私たちと独立に存在し私たちの生活を征服する客観化された(あるいは支配する)諸関係においてどのようにして人々がアクティブであるかということ、人々の使用のために発見し、マッピングするワークを始める。(Smith & Griffith 2022:23)

4. 概念、しかし理論ではなく

第2部「役に立つ概念」の4つの章では、IEの研究者が一つ目の対話を組織化する上で役に立つ諸概念として、「言説(4章)」「ワーク(5章)」「テキスト(6章)」が紹介される。第2部の最初の章である、第3章「概念、しかし理論ではなく」では、IEの探究におけるこれらの概念の位置づけが述べられている。これらの概念は、エスノグラファーが他に何を学ぶとしても、これらの一般的領域は取り残されないようにするべきIEの着眼点を示す。ある意味でこれは理論だが、これらの概念は解釈やものごとを選択するための枠組を押し付けることを意図してはいないとSmithらは指摘する(Smith & Griffith 2022:10)。むしろこれらの概念は、人々の経験的知識からどのようにしてIEのエスノグラフィーを発展させることに役立つことがらを引き出しうるのかをめぐり、IEの興味関心を示唆するものである。

4-1 第一の対話における着眼点としての「役に立つ概念」

第1部においてSmithらは、IEの探究が本質的に対話的な特徴を有することを強調してきた。IEの研究に関心のある人々や、自分の生活における喫緊の課題がいかんして支配する諸関係に接続されているかを理解する必要のある人々のために、最終的に書かれたものとしてのエスノグラフィーを生み出すことの中には、対話の二つの契機がある。

IEの探究は、実際の人々からかれらが行なっていることについて学ぶということから始まる。IEの研究者は、人々が話すことや自分が観察していることから得られるものに対して、オープンでなければならない。学ばれていることは、コントロールされない。しかし同時に、IEの研究者は、エスノグラフィーの創出に関連する自分の興味関心をその中に挿入してもいる。かれらは人々に、具体的な例をくれるよう、あるいは、単純にもっと話してくれるよう求める。しかしかれらはまた、第2部の4章以下で紹介されるような概念によって導かれた特定の興味関心を持っているだろう。IEの探究にとって不可欠なことは、IEの研究者が人々との関係を築くこの最初の対話である。

人々と話をするのであれ、かれらの行なうことを観察するのであれ、自分自身の経験に依拠するのであれ、あるいはそのいくつかを組み合わせるのであれ、研究者が学んでいる対話がある。IEの研究者は、期待すべきことや、学ばれるだろうことや、回答者が自分を連れて行くかも知れない場所について知らない。IEの研究にとって、無知は大きな強みになる。むしろ、自分と同じ専門領域で仕事をする人をインタビューすることは、特別の問題を引き起こす可能性があるとして、Smithらは指摘する(Smith & Griffith 2022:27)。この場合、インタビューの参加者は皆、自分自身の知識をいとも簡単に自明視してしまう可能性がある。エスノグラファーは、人々が何について話しているかを自分は知っていると思ひ込み、人々が行なうことやかれらが他者たちと関係しているやり方の具体的な詳細について見落としてしまう可能性がある。その結果、書き写されたインタビューから何も発見できないという事態が生じうるのである。

人々の経験—エスノグラファー自身の経験を含みうる—から学ぶ対話は、IEの探究にとって不可欠だが、それはまだIEのエスノグラフィーではない(Smith & Griffith 2022:28)。研究者が自分の学んだことに依拠して、IEのエスノグラフィーを組み立てるための二番目の対話がある。それは、私たちと独立に存在し私たちの生活を組織化する社会諸関係—支配する諸関係—に、私たち自身が自らの実際の行為をとおしてアクティブに参加しているやり方を発見し、書き表すための対話である。

二番目の対話は最初の対話で学ばれたことの上に築かれ、学ばれたことを、それを読むかもしれない人々のために書かれたIEのエスノグラフィーにする。最初の対話は、通常「データ」と記述されるものを組み立てる。ただしIEにとっての「データ」とは、ある出来事の完全に正確な記述報告(account)、あるいは、人々や研究者から独立して確立された事実情報を意味するわけではない。IEの文脈で「データ」という言葉は、IEの研究者が、研究に関わっている人々と話したりかれらを観察することによって、かれらの行なっていることや実践について学んだことを表している。今やそれは、何らかの固定されたテキストの形式、書き写されたもの、音声を録音したものになっている。これらの「データ」としての最初の対話は、対話の二番目の契機へ引き込まれるのである。

前述したように、二つの対話はIEの探究の実務において完全に分離されているわけではない。IEの研究者は、エスノグラフィーを書く過程において、特定の領域についてもっと学ぶ必要があり、さらなる調査が必要だと発見するかもしれない。全体として、IEのプロジェクトは探査と発見の過程である。しかしそれでも、IEの探究における対話の二つの契機は、いくぶん異なっているとSmithらは指摘する(Smith & Griffith 2022:28)。第二部で取り上げられる諸概念は、IEの探究の第一の対話の実務に有効に関わっていると考えられるものである。それらの概念は、人々とのやり取りや観察を行なっている時に、研究者の関心をIEが注目すべきことへ導くのに役に立つものである。

4-2 IEの探究における概念実践としての「役に立つ概念」

2章までの議論の中で、IEの方法—それは、観察することや人々との会話で研究者が学ぶこととの対話において活性化される—について、いくつかの一般的アイデアが示されてきた。IEによって与えられる最も一般的な指令は、IEの探究が実際の人々の行なっていることや、かれらの経験や、かれらの行なうことが他者たちの行なうことと関係されるやり方に基づいていることである。その上で3章においてSmithらは、IEの探究にとって不可欠なこととして、言葉を実際の実践として認識することを挙げる。IEにとって言葉とは、常にそれを使用する実践と不可分である。声に出す場合でも頭の中での場合でも、言葉とは人々が行なう何かであり、人々の行なっていることが関係されるやり方にとって不可欠な構成要素である。

3章では、IEの探究において役に立つと発見された諸概念が、エスノグラファーによってどのように使われるべきかが考察される。

イギリスの「日常言語」の哲学者である Gilbert Ryle は、実践としての概念やその作動の仕方について書いている。彼は、人々がいかにして理論化を行なっているかを観察する。彼にとって、理論化とは「大部分沈黙の中で遂行される活動だ、しかしそれにもかかわらず遂行されるのである」(Ryle 1949:27)。IEの概念実践は、理論ではなく、実際に遂行される活動である—私たちはそれをそのようには自覚していないかもしれないが(Smith & Griffith 2022:29)。

ここでSmithらは、IEの研究者たちが探究において役に立つと発見した諸概念は理論的機能を持たない、ということ再度強調する。4章以降で紹介されるのは、「データ」収集の過程を方向づけたり、人々との対話に従事している研究者の焦点を合わせるのを助けると発見された、概念実践のあり方である。すなわち、それらの概念は、人々と話すことや観察から学ばれていることを、解釈したり定式化したりするために使用されるのではないということだ。研究を選択的に方向づける概

念や理論に研究者が支配されている時、人々はそれらの用語で解釈されるべき研究の客体になってしまうと Smith らは指摘する。

質的社会学における標準化された実務は、インタビューされた回答者全員に一律に適用されうる一組のコードを確立しようとする。特徴的には、インタビューは標準化された質問を使って行なわれる。インタビューされる人々がそれらの質問に答えられるかどうか、それらの質問の意味を理解できるかにかかわらずにである。ここで Smith は、カリフォルニア大学パークレー校の学生だった時、定式化された質問を使ったインタビューを受けたこと、そして研究者の励ましを受けながら、いかにして自分がコード化された答えを使って質問に答えなければならなかったか、というエピソードを挙げる (Smith & Griffith 2022:29)。定式化された質問は、理論的枠組がどのようなものであっても合致するよう考案されていた。しかし、Smith にとってどの答えも、実際には、自分の状況に合致していなかった。単純に、彼女の生活の中には答えがなかった。しかし彼女はその問いに答えを与えたのである。

その種の方法において、データの収集は、あらかじめ設定された概念枠組に合致するよう考案されている。そして、インタビューで得られたデータの分析もまた、同じ概念枠組に順応することが確かにされている。質問に答えた人々は、社会学者の概念的支配下に置かれ、調査の発見物を生み出すことにおいて実際の人々としての役割を果たしていない。かれらは社会学的一般化のための、単なる手段となる。そのような言語実践は、自分の身に何が起きているかをめぐる人々の経験のうち、理論の概念や枠組に合致されうる諸側面のみを注目して選び出す。この場合、理論はいわば「外殻・骨組(shell)」として作動し、その「殻」を満たしうる内容を統制し、満たしえないものを排除するのだと、Smith らは指摘する (Smith & Griffith 2022:29)。経験されたものとしてのアクチュアリティは、理論的「殻」に合わせられ、もはや著者の一般化のための事例や事例に過ぎないものになる。主体としての人々は置き換えられてしまうのである。

4章以下で Smith らは、IE の探究にとって「役に立つ概念」として「言説」「ワーク」「テキスト」を紹介、解説する。そして、IE の研究者がどのようにしてこれらの概念を「遂行」してきたのか、これらの概念が IE の研究者に何を開いてきたのかを、詳しく述べていく。それらの概念は、もし適切に使用されるならば、人々の行なっていることのうち、互いの行為を連係しているとは気づかず認識しないだろうような諸側面に焦点を合わせることを可能にする。

IE の探究にとって、それらの概念の使用は必須というわけではないと Smith らは言う。研究者が人々とともにかれらの生活の諸問題を探索することに、それらの概念は関連がないということが発見されるかもしれない。それでもそれらの概念は、IE の探究の「データ」になるものの基礎を、人々がどのようにして毎日の生活の中で物事に取りかかっているのかについてのかれら自身の知識に置くことに関しては、非常に役に立ちうると Smith らは言う (Smith & Griffith 2022:30)。

それらの概念は、人々から学ぶことが、二番目の対話である IE のエスノグラフィーを書くことにとりわけ関連のある諸側面を含むように、対話における IE 研究者の役割を方向づける助けになる。それらは、人々が話せることの中から、すでに学ばれたことを超えていく発見を可能にするのだと Smith らは言う。自身の経験から話すことが生み出すある種の自由の中で人々が話し続ける場合、人々から学ぶことがあちこちさまよってしまうという事態が容易に起こりうる。様々な IE 研究をとおして、「言説」「ワーク」「テキスト」という概念は、解釈を押しつけることなしに、対話における注目を組織化し導く助けになるとわかったのだ。もちろん IE のエスノグラファーは、人々が自分の経験から自由に話せることを望む。しかしかれらは同時に、人々が、通常の話す過程にお

いては失われる可能性のある自らの生活の諸側面を含められるようにする必要があるのである。

4-3 言説、ワーク、テキスト

3章では最後に、3つの概念をめぐる4章以降の議論について、要点が述べられる。

最初に考察されるのは、言説(discourse)という概念だ。IEの研究者は、人々が自らの経験を話すために使っている言語に気がつく必要があるとSmithらは指摘する。研究者が話し手と同じ職業で仕事をしている場合、問題が起こりうる。その職業に特有のある種の専門的な言葉が使用されている場合、エスノグラファーは話し手の話していることを知っている、いとも簡単に自明視してしまうかもしれない。他方、IEの研究者はまた、人々が言葉をどのように使用しているかについて、何らかのことを学ぶ必要があるかもしれない。

二番目は、IEによる「ワーク(work)の気前のよい考え方」とSmithらが呼ぶものである。この言葉は、通常の使い方においては、それを行なうことに対して人々に賃金が支払われることがらを第一に指す。IEはこの使い方を堅持するのではなく、代わりに、研究者の注意を人々が行なうだろうあらゆることに向ける。IEのワーク概念には、人々が行なうつもりであり、時間や身体的努力を要するあらゆることが含まれる。さらにこのワーク概念は、人々の考えや感情を行なわれていることとして認識し、それに注目することを可能にするとSmithらは指摘する。

三番目は、テキスト(text)である。IEにとって、テキストに着目することは、institution的形式における人々の行為の組織化を、エスノグラフィー的探究の射程の内部に入れる手段である。IEは、テキストを読んだり書いたりする人々の実践を、エスノグラフィーに組み入れ可視化しようとする。ここでテキストという概念は、理論的な重みを持つものではないとSmithらは言う(Smith & Griffith 2022:31)。この概念は、IE研究者の注意を、メッセージやイメージや音声を一誰であれ作った人の存在を置き換える技術を使いながら一運ぶ、物質的媒介に向けるものである。テキストは、アクティブに連係する人々の行なっていることに、実際に入り込んでいる。このことへの注目は、人々の生活を征服する、支配する諸関係のエスノグラフィーを開発するために不可欠だと、Smithらは指摘するのである。

これらの概念は、当たり前にされてきただろう社会世界の諸側面を視野に入れるものである。これらは、自分の経験を話している人々とIE研究者との対話を組織化するのに役に立つ。これらの概念は、IE研究者の実務を組織化する言葉であり、話す人々に押しつけられたり、かれらに紹介されるべきものではない。これらは、人々にもっと話すことや具体的な例を与えることなどを求める際に、IE研究者の興味関心を方向づけるものである。IEの研究者はもちろん、自分が予期しなかったことも学んでいる。しかしそれでも、これらの概念が導くIEの興味関心を持続させる必要がある。そのような興味関心は、IEの研究者が最初の対話—人々から学ぶという対話—に参加しているやり方に入り込み、それを修正するのである。

第一の対話におけるトークの中で、人々の経験はいつでもそれが話されている言葉において組織化されたものとして出現する。そのようなトークはまた、研究者と人々との間でやりとりが継続される場合には、より具体的な詳細を生み出す可能性を有している。話し手である人々は、記憶をさらに掘り下げることができるし、聞き手であるIE研究者の興味関心を引くことについてさらに広げることができる。しかしながら、社会学的インタビューの実務では、人々のトークの中に抽象概念が入り込んでしまうということが、思ったよりずっと簡単に起こりうるとSmithらは言う。このような場合、研究者自身による「言説」「ワーク」「テキスト」の概念実践は、人々が話しているよう

に見えて実際はまだ話していないこと具体例を求めるよう、研究者の注意を喚起するのである (Smith & Griffith 2022:31)。

これらの概念は探究の「ガイド」であると Smith らは言う。この概念はカテゴリーや解釈を押しつけない。そうではなく、探査のためのドアを開けるのである。Smith らが強調するのは、言説、ワーク、テキストは、調査過程にいるエスノグラファーが、起こっているだろうことに注意を向けるのを助ける概念だということだ。それらは、インタビューで人々の話を聞いている時に一あるいは観察している状況で、何が行なわれているかを見ている時に一、研究者の注意を組織化するのを助ける概念なのである。

5. おわりに

ここまでの議論をまとめると、以下ようになる。

IE は社会学であり、実際の人々やかれらの行なっていることから始まり常にそこにとどまる、社会的なもの (the social) への探究方法である。ここで「社会的なもの」とは、他者たちの諸活動との関係という側面に着目した、人々の進行中の諸活動のことである。IE はこの場所から、人々の実際に行なっていることが、かれらを超えて広がりかれらの生活を征服する institutional (institutional) 諸関係にどのようにして巻き込まれ関係されるかを開き、探究するのである。IE の探究の基礎はいつでも、実際の場面で実際の時間に他者たちとの関係において進行する、実際の個人の実践である。と同時にこの探究は、個人を超え日々の生活を超えて広がる社会諸関係が、どのようにして人々の生活に入り込み、人々の生活を組織化するのかを発見しようとするものである。

確立された社会学における標準的な社会学的記述では、人々の行為やかれらの間で起こっていることを一般化された抽象概念で置き換えるという、客観化する言語実践が行なわれている。そのような言語実践は、自分の身に何が起こっているかをめぐり人々の経験のうち、理論の概念や枠組に合致されうる諸側面のみを注目して選び出す。この場合、理論はいわば「外殻・骨組 (shell)」として作動し、その「殻」を満たしうる内容を統制し、満たしえないものを排除する。経験されたものとしてのアクチュアリティは、理論的「殻」に合わせられ、もはや著者の一般化のための事例や実例に過ぎないものになる。主体としての人々は置き換えられてしまうのである。

抽象的な概念空間の中で、それらの概念的実体は、人々やかれらが実際に行なっていることには一度も言及することなく、行為の主体や客体の役割を果たすことができる。確立された社会学の言語実践の構成的慣習は、人々の行なっていることを示す動詞を名詞相当語句に翻訳し、行為体としての実際の人々の存在を置き換えていく。社会学のこの構成的慣習は、実際の人々の生活と行なっていることの立ち位置から社会学を書こうとする IE の試みを、容赦なく邪魔するものである。それゆえ IE は、人々の存在を一般化された抽象概念的に置き換えるような言語実践を採用してきた社会学から、自覚的に分かれようとするのである。

IE の探究は、対話的な特徴を有しており、二つの対話の連鎖としてのエスノグラフィーを開発する。一つ目は、ものごとがどのようにして行なわれているのかや誰が何を行なっているのかについて、その知識の源となる人々から学んでいる際に行なわれる対話だ。二番目は、第一の対話で学ばれたことから、IE のエスノグラフィーとして書かれうることがらを組み立てる際に行なわれる対話である。個別的で具体的な人々の経験の記述報告を資源として利用しながら、人々の行為の多

様な側面が、個別具体的な個人の経験を超えて広がる社会関係によって組織化されるやり方を可視化するための対話である。二つの対話は、実際の探究において完全に分離されているわけではない。IEの探究は、この二つの対話を行きつ戻りつしながら行なわれる、一連の発見の過程として捉えられている。

第二部で取り上げられる諸概念—「言説」「ワーク」「テキスト」—は、IEの探究の第一の対話の実務に有効に関わっていると考えられるものである。それらの概念は、人々とのやり取りや観察を行なっている時に、研究者の関心をIEが注目すべきことへ導くのに役に立つものである。

IEの研究者たちが探究において役に立つと発見した諸概念は、理論的機能を持つものではない。すなわち、それらの概念は、人々と話すことや観察から学ばれていることを、解釈したり定式化したりするために使用されるのではないということだ。第二部で紹介されるのは、「データ」収集の過程を方向づけたり、人々との対話に従事している研究者の焦点を合わせるのを助けると発見された、概念実践のあり方である。IEの研究者がどのようにしてこれらの概念を「遂行」してきたのか、これらの概念がIEの研究者に何を開いてきたのか、詳しく述べられる。

第一の対話において、IEの研究者は、ある特定の出来事の完全に正確な記述報告を得ることに興味がない。そうではなくむしろ、物事がなされるやり方や、それが個人を超えた行為の連鎖とつながれるやり方についての人々の知識に関心がある。研究者は、具体的に詳細で精巧な記述報告を欲している。なぜならば、より多く学ぶほど、人々の話していることが特定の記述を超えた諸関係につながれるやり方を、よりよく認識できるようになるからだ。したがって、IEのエスノグラファーは、人々に具体的な例や記述を求める必要があり、人々が抽象概念から降りて来るように励ます必要がある。IEの探究にとって「役に立つ概念」は、もし適切に使用されるならば、人々の行なっていることのうち、互いの行為を連係しているとは気づかず認識しないだろうような諸側面に焦点を合わせることを可能にする。もし人々のトークの中に抽象概念が入り込んでしまった場合、研究者自身による「言説」「ワーク」「テキスト」の概念実践は、人々が話しているように見えて実際はまだ話していないこと具体例を求めるよう、研究者の注意を喚起するのである。

ここまでの議論で強調されてきたのは次の二点である。一つは、IEの探究は、実際の人々の行なっていることや、かれらの経験や、かれらの行なうことが他者たちの行なうことと連係されるやり方に基礎を置くということである。もう一つは、IEの探究にとって、言葉を実際の実践として認識することが不可欠だということである。IEにとって言葉とは、常にそれを使用する実践と不可分である。言葉とは人々が行なう何かであり、人々の行なっていることが連係されるやり方にとって不可欠な構成要素であるとみなされているのである。このようなものの見方に依拠しながらIEは、IEの探究それ自体がどのような行為の連係の一部なのか、IEの探究それ自体がどのような言語実践なのかを常に問い直しながら、「私たちがその一部でありながら直接的に理解することができないものについての、私たちの知識の範囲を拡大することができるような社会学」を創造しようとするのである。

注

- (1) work(ワーク、仕事)という言葉は、通常の使い方においては、第一に、それを行なうことに対して人々に賃金が支払われることがらを指すだろう。しかし5章で詳述されるように、IEで使用されるワークには、人々が行なうつもりであり、時間や身体的努力を要するあらゆることが含まれている。

文献

- Griffith, A. I. & Smith, D. E. (2005) *Mothering for Schooling*. New York : Routledge.
- Rankin, M. J. & Campbell, M. L. (2006) *Managing to Nurse : Inside Canada's Health Care Reform*. Toronto : University of Toronto Press.
- Ryle, G. (1949) *The Concept of Mind*. London : Routledge.
- Smith, D.E. (1987) *The Everyday World as Problematic : A Feminist Sociology*. Toronto : University of Toronto Press.
- — — (1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*. Boston : Northeastern University Press.
- — — (1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling*. London : Routledge.
- — — (1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*. Toronto : University of Toronto Press.
- — — (2005) *Institutional Ethnography : A Sociology for People*. Lanham, MD : Altamira Press.
- — — (2016) Exploring Words as People's Practices. in Julianne Lynch, Julie Rowlands, Trevor Gale, and Andrew Skourdombis (eds.) *Practice Theory and Education: Diffractive Readings in Professional Practice*. London : Routledge. pp.23-38.
- 上谷香陽 (2010a) 「ドロシー・スミスにおける社会学的記述の問題—institutional ethnographyという視点」『ソシオロジスト』12(1) pp.73-96. 武蔵社会学会。
- — — (2010b) 「対話としての『経験』—ドロシー・スミスの視点」『武蔵大学総合研究所紀要』no.19, pp.117-133. 武蔵大学総合研究所。
- — — (2017a) 「日常生活世界から社会を知る方法—ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点」『文教大学国際学部紀要』27(2)、pp.1-16. 文教大学国際学部。
- — — (2017b) 「日常生活世界の記述可能性—ドロシー・スミス『制度のエスノグラフィー』の着眼点」『文教大学国際学部紀要』28(1)、pp.1-22. 文教大学国際学部。
- — — (2018a) 「テキストに媒介された言説とイデオロギー・コード—ドロシー・スミスの institutional ethnography をめぐって」『文教大学国際学部紀要』28(2)、pp.1-20. 文教大学国際学部。
- — — (2018b) 「社会を知るもう一つのやり方—ドロシー・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』29(1) pp.1-18. 文教大学国際学部。
- — — (2019) 「ドロシー・スミス Institutional Ethnography におけるワークおよびワーク・ノレッジ概念の検討」『文教大学国際学部紀要』30(1)、pp.1-16. 文教大学国際学部。
- — — (2020a) 「研究ノート：経験を語る二つの様式の断絶—知識の社会的組織化をめぐるとドロシー・スミスの着眼点」『文教大学国際学部紀要』30(2)、pp.55-68. 文教大学国際学部。
- — — (2020b) 「研究ノート：「社会」という言葉を使って Society について考えるということ—柳父章の翻訳日本語論を手がかりに」『湘南フォーラム』24、pp.109-122. 文教大学湘南総合研究所。
- — — (2020c) 「ドロシー・スミスの社会学における institutional discourse について」『文教大学国際学部紀要』31(1)、pp.1-14. 文教大学国際学部。
- — — (2021a) 「研究ノート：社会学的記述における二重の関係について—ドロシー・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』31(2)、pp.89-104. 文教大学国際学部。
- — — (2021b) 「『女性の経験』と知識の社会的組織化—ドロシー・スミスのIEに依拠した『82年生まれ、キム・ジヨン』の読解(1)—」『文教大学国際学部紀要』32(1)、pp.1-19. 文教大学国際学部。

- — —(2022a)『『女性の経験』と知識の社会的組織化—ドロシー・スミスのIEと『82年生まれ、キム・ジョン』の接点(2)—』『文教大学国際学部紀要』32(2)、pp.1-19. 文教大学国際学部。
- — —(2022b)「社会的現実をめぐるIEの論点—ドロシー・スミスの議論に依拠して—」『湘南フォーラム』26、pp.1-16. 文教大学湘南総合研究所。
- — —(2022c)「知識／言語の社会学的探究の論点—第二波フェミニズムの問題提起をめぐる—」『応用社会学研究』64、pp.179-194. 立教大学社会学部。
- — —(2022d)「テキストの現実と質問の装置—Institutionsの力をめぐって—」『文教大学国際学部紀要』33(1)、pp.13-25. 文教大学国際学部。

